

# 少女マンガ雑誌における「外国」イメージ

——1960～1970年代の「週刊マーガレット」分析より——

増田のぞみ・猪俣紀子

“Foreign Country” Images in Shojo Manga Magazines

——An Analysis of “*Weekly Margaret*” in 1960～1970’s

MASUDA Nozomi, INOMATA Noriko

**Abstract** : This text presents an analysis of “foreign country” images as depicted in the “*Weekly Margaret*”, a Manga magazine intended for girls, in the latter half of 1960’s through mid-1970’s. The time span of 1960’s～1970’s was a period in the history of Shojo Manga when “foreign countries” were pictured in abundance. Most of the countries, however, were obscure in origin, not identifiable where they were located in Europe and the US. Only countries identifiable, so it was noted, were the US and France. Since 1980’s, the number of Manga works featuring foreign countries has been on the decline, and it can be said that changes in the functions of Shojo Manga magazines have been demanded. Probably we may attribute the inroad of fashion magazines that actively introduce foreign cultures and countries to such changes as a background. It suggests that, in analyzing Shojo Manga magazines, we need to take into account the cross-disciplinary influence effects by other media.

**要旨** : 本稿は、1960年代後半から1970年代半ばの少女マンガ雑誌「週刊マーガレット」を分析対象とし、そこに描かれた「外国」イメージを分析するものである。1960～1970年代は少女マンガの歴史のなかで「外国」が多く描かれた時期であり、その内訳は、西洋だがどこか特定できない国が最も多く、特定できる国としてはアメリカとフランスに集中していることがわかった。1980年代以降、外国を舞台とする作品は減っていく傾向があり、少女マンガ雑誌の役割に変化が求められていたといえる。その背景としては外国を積極的に紹介するファッション誌の創刊などがあると考えられる。少女マンガ雑誌を分析する際には、領域横断的に他のメディアとの影響関係も視野に入れる必要があることが示された。

## はじめに

近年、少女マンガ雑誌に関する言及や催しを目にする機会が増えた。すでに半世紀をこえて読み継がれてきたメディアである少女マンガ雑誌は、ここ数年、主要なタイトルが次々と節目の年を迎えている。月刊誌としては、2014年に『なかよし』（講談社）、2015年には『りぼん』（集英社）がそれぞれ創刊60周年を迎えた。また2013年に『マーガレット』（集英社）の創刊50周年を記念して企画された「わたしのマーガレット展」は全国を巡回して各地で話題となっており、その関心の高さが示されたといえる。

本研究の筆者ら（増田・猪俣）は、これまでメディア文化研究、マンガ研究、比較文化研究の立場から、日本やフランスの「少女」向けメディアの研究を続けてきたが<sup>31)</sup>、今回、改めて戦後の少女文化のなかで少女マンガが

果たしてきた役割を問い直したいと考え、少女マンガ雑誌の調査に着手することとした。

少女マンガ雑誌の分析を行ううえで、本研究が指針として留意したいのは、以下の点である。まず、これまでの少女マンガ研究のなかで語られることが多かった特定の時期や作家、作品への評価に偏ることなく、できる限りフラットな視点で、雑誌の変化を数量的に示す。少女マンガに関する言説でしばしばみられる、「黄金時代」とされる1970年代を「到達点」とみるような枠組みからは相対的に距離を置き、変わり続ける雑誌の姿を追っていく。

また、従来の少女マンガ研究に対しては、しばしばジェンダー論的な視点への偏りが指摘されてきた<sup>2)</sup>。本研究では、物語の舞台となる国、「外国」イメージ、髪や瞳の表現をみることを通して、人種や階級、表現論的な問題など、より幅広い視野から少女マンガを考察したいと考えている。

さらに、本研究が重視するのは領域横断的な視点である。「少女」たちが関わるメディアは複数あるなかで、少女マンガはどのような特徴を持つのか。少女雑誌や女兒向け雑誌、ファッション雑誌をはじめ、テレビアニメ、テレビドラマや映画といった映像系の媒体など、隣接するさまざまなメディア文化との関わりにも注目していく。

こうした視点を通して、日本のメディア文化の特徴となっている性別と年齢によりセグメント化（細分化）されたメディア文化のあり方自体を問うことを試みる。性別と年齢によって読者ターゲットを細分化するのは雑誌メディアの特徴であり、日本の少女文化／少年文化の基盤は近代の学校制度とともに雑誌メディアが作り出したものであるといえる。マンガが少年／少女／青年／女性といったサブカテゴリを持つのも、マンガが雑誌を中心に展開されてきたメディアであるからに他ならない。

近年、多くの女性が「少年」向けマンガ雑誌を愛読し、「少女」向けのメディアにも多くの男性ファンが存在するなど、性別により分化されたメディア文化のあり方は明らかに変化している。とはいえ、その枠組みがまったく無効化されているわけでもない。本研究は、最終的に、こうした少女向け／少年向け文化の枠組み自体を問い直すことを目指している。今回はその手始めとして、1960年代から1970年代にかけての『週刊マーガレット』を分析することとする。

## 1. 本稿の目的

本稿は、1960年代後半から1970年代の少女マンガ雑誌『週刊マーガレット』を分析対象とし、そこに描かれた「外国」イメージを分析するものである。今回、1960年代から1970年代という時期と「外国」イメージというテーマに注目したのは以下のような理由がある。

1960年代から1970年代にかけて、戦前から続いてきた日本の少女雑誌は、少女マンガのページ数を次々と増やし、少女マンガ雑誌へと変貌していく。この時期に、戦後生まれの女性作家が活躍を始め、新しい雑誌の創刊が続き、少女マンガが「黄金期」を迎えたとされる。しかし、それは世界的に見ると珍しい現象であった。たとえばフランスでは20世紀初頭から存在していた少女雑誌が、1960～1970年代に廃刊、もしくは少年誌と統合し、姿を消すという日本とはまったく逆の動きをたどり、少女向けコミック作品が長らく制作されてこなかったという歴史的経緯がある<sup>3)</sup>。また、イギリスやスペインでも、1980年代に少女マンガ雑誌が廃刊していき、1990年代に日本の少女マンガが流入していったことが指摘されている<sup>4)</sup>。

一方、筆者らがともに関わっているテレビアニメの調査においては<sup>5)</sup>、とくに1960年代から1970年代にかけては、「少年」向け作品と比較して、「少女」向けには「外国」を舞台とした作品が多いという結果が示された<sup>6)</sup>。少女マンガに関する先行研究においては、この時期に外国を舞台とした作品が増え、1970年代後半以降に減ってい

1) 増田2012, 増田2013, 増田2015, 猪俣2011, 猪俣2014, 猪俣2015など。

2) ベルト2015など。

3) 猪俣2011, p.184。

4) 日本マンガ学会少女マンガ誌部会2015年度12月例会における藤本由香里による報告より。

5) 科学研究費(基盤C)、2014年度～2016年度、「テレビアニメデータベースを用いたナショナルリズムのジェンダー化に関する実証的研究」(研究代表者・増田のぞみ)。

6) 増田のぞみ・東園子・猪俣紀子・谷本奈穂・山中千恵「日本におけるテレビアニメ放映データの分析——「少女」向け作品の概要」, 中部人間学会報告(於・仁愛大学), 2015年11月。

くことはすでに指摘されているが<sup>7)</sup>、どのような国がどのように描かれていたのかは明らかにされていない。

本稿では、1960年代後半から1970年代の少女マンガ雑誌において「外国」がどのように描かれていたのかを調査し、その背景を明らかにする。そのうえで、少女マンガ雑誌の分析には、領域横断的な視野が不可欠であることについても考察したい。

## 2. 調査の概要

今回の調査では、1967年、1969年、1971年、1973年、1975年の『週刊マーガレット』について、各1月、4月、7月、10月の最初の号を対象とし、マンガ作品の舞台になっている国を調べた。マンガ作品としては、4ページ以上のストーリーマンガ作品すべてを対象としている<sup>8)</sup>。

作品の舞台になった国を各号ごとにまとめたのが表1であり、それぞれの国の割合を集計したのが図1である。

表1 マンガ作品の舞台となった国

|         | 日本  | フランス | アメリカ | イギリス | インド | スペイン | オーストリア | ドイツ | 西洋だが国不明 | どこの国か不明 |
|---------|-----|------|------|------|-----|------|--------|-----|---------|---------|
| 1967年1月 | 5   | 1    |      |      |     | 1    |        |     | 1       |         |
| 5月      | 7   |      |      |      |     |      | 1      |     | 1       |         |
| 7月      | 7   |      | 1    | 1    |     |      |        |     | 1       |         |
| 10月     | 7   | 1    | 1    |      |     |      |        |     | 1       |         |
| 1969年1月 | 8   |      |      |      |     |      |        |     | 2       |         |
| 4月      | 4   |      |      | 1    |     |      |        |     | 5       |         |
| 7月      | 6   |      |      | 1    |     |      |        |     | 3       |         |
| 10月     | 6   |      | 1    | 1    |     |      |        |     | 1       |         |
| 1971年1月 | 7   |      | 2    |      |     |      |        |     | 1       |         |
| 4月      | 10  |      | 1    |      |     |      |        |     |         |         |
| 7月      | 7   | 1    | 1    | 1    |     |      |        |     |         |         |
| 10月     | 9   |      | 1    |      |     |      |        |     |         |         |
| 1973年1月 | 3   | 2    | 2    |      | 1   |      |        |     | 2       |         |
| 4月      | 6   | 2    | 1    |      |     |      |        |     | 1       |         |
| 7月      | 7   | 2    | 2    |      |     |      |        |     | 1       |         |
| 10月     | 9   | 2    | 1    |      |     |      |        |     |         |         |
| 1975年1月 | 9   | 1    |      |      |     | 1    |        | 1   |         |         |
| 4月      | 10  | 1    | 1    |      |     |      |        | 1   |         |         |
| 7月      | 7   | 1    | 1    | 2    |     |      |        | 1   |         |         |
| 10月     | 9   | 1    |      | 1    |     |      |        |     |         | 1       |
| 合計      | 143 | 15   | 16   | 8    | 1   | 2    | 1      | 3   | 20      | 1       |

全体を通して、最も多く舞台となっている国は「日本」であり、全作品数209のうち、143作品を占めた。次いで「西洋だが国不明」が20作品、「アメリカ」16作品、「フランス」15作品、「イギリス」8作品、「ドイツ」3作品、「スペイン」2作品、「オーストリア」、「インド」、「どこの国か不明」各1作品という結果となった。「西洋だが国不明」というのは、登場人物の名前や設定などから明らかに「西洋」であることはわかるが、どこの国かが特定できない作品である。この時期の少女マンガには、国を特定できない「西洋」が多く描かれていることが

7) 日本マンガ学会少女マンガ誌部会2014年度例会では、明治大学国際日本学部・藤本由香里ゼミによる少女マンガ雑誌調査の報告会が行われ、『週刊マーガレット』（『マーガレット』）および『別冊マーガレット』に関して、数多くの項目に関する調査結果が示された。その一部（主人公の年齢や内語の有無など）については、藤本由香里「少女たちの王国——「マーガレット」「別冊マーガレット」リアル読者の半世紀」（2014年、集英社）にまとめられている。

8) 調査にあたっては、甲南女子大学文学部メディア表現学科が所蔵する少女マンガ雑誌コレクション、大阪府立図書館国際児童文学館および増田・猪俣個人が所有する資料を利用した。所蔵のないものに関してはなるべく発刊日の近い号を閲覧した。

わかった。

日本を舞台とする作品と外国を舞台とする作品の割合を刊行年ごとに見てみると、1969年4月号や1973年1月号のように外国を舞台とする作品が半数を超える号も存在するが、1971年4月号のように11作品中10作品が日本を舞台としている号もあり、月ごとのばらつきが大きい。この時期のすべての号を平均すればおよそ7割が「日本」を舞台とした作品であり、「外国」を舞台とする作品は約3割という結果となった。

### 3. 「外国」を舞台とする作品

作品全体のなかで「外国」が舞台となったものは67作品で、全体の約32%を占める。「外国」を舞台とする67作品のなかでは、「インド」が1作品と「不明」1作品のほかは、すべてアメリカとヨーロッパの国々で65作品を占めている。また、「アメリカ」として登場するのは「北米」のみとなっている。このことから、「外国」を舞台とするといっても、その分布は「西洋」の国々に大きく偏っていることがわかる。そのうち「西洋だが国不明」を除き、国名が確認できるなかでは「アメリカ」が16作品、「フランス」が15作品と半数弱を占め、この時期の少女マンガの舞台としてとくに多く描かれていることがわかった。

「外国」を描くことは、少女マンガ雑誌にとってどのような意味があったのだろうか。米沢嘉博は『戦後少女マンガ史』において1962年の『週刊フレンド』創刊時の話題に触れ、それまで多く描かれていた松島トモ子などの少女スターや少女歌手、バレエといった少女たちの夢やあこがれの対象が、この時期に「外国」へのあこがれへと変化したと指摘した。「おしゃれ時代」を演出しようと世界巡りの写真や外国の少女の生活を紹介し、「外国」へのあこがれが少女誌自体のモチーフだったと記述している<sup>9)</sup>。

また外国を舞台とすることで、ストーリーにも変化があったとする。少女マンガが描くのは内面的成長や心理的葛藤、肉親間の愛憎といった日本のメロドラマの重大な問題などではなく、憧れ、夢見、ため息さえついでいればよい夢物語の世界になったという。米沢は、「幸せ」とは好きな人と結婚することであるという単純明快な論理のもと、作られた外国のゴージャスな舞台は、それまでの「少女マンガの湿っぽさに対抗するべく生まれてきた想像力の遊びによるハッピーランド」であったと述べた。

このように「外国」が多く描かれるようになった1960年代であるが、「西洋だが国不明」に注目すると、1960年代と1970年代で多少の変化が見られる。「西洋だが国不明」の作品は1969年に突出して多く、その後1973年にも登場してはいるものの、1970年代には名前の特定できる外国の数が増えており、どこの国かわからない西洋の国が描かれる機会が明らかに減少する傾向がある。このことは、描き手の側にも読者の側にも、何らかの変化があったことを示していると考えられる。

1970年代に西洋を舞台に多くの作品を描いた竹宮恵子は、「時代の匂いをまとい、次の方向を指し示すこと。それは読者に新しい知識を提供すべき立場の漫画家にとって必須の条件だった」と述べている。その言葉通り、1972年には「できる限りリアルなヨーロッパを届けたくて、自分たちでアテンドする一ヶ月半の欧州滞在を敢行し、壁の厚さやドアの大きさ、住居構造まで確かめて欧州の生活感を描くことに努力した」という<sup>10)</sup>。この時期には、まだ女性の海外旅行は当たり前になっているとはいえ、竹宮らのヨーロッパ旅行は読者にも羨望の眼差しで見られていた。しかし外国旅行が「ありえない」ことではなく、一般の女性たちにも手の届きそうなところまで近づいてきている感覚はあっただろう。少女マンガにあらわれたこうした変化は、どこの国かわからない西洋ではなく、リアルな外国を感じたいという読者の欲求に応えた変化といえるかもしれない。

9) 米沢 1980=2007, pp.147-148.

10) 竹宮 2011, p.97.

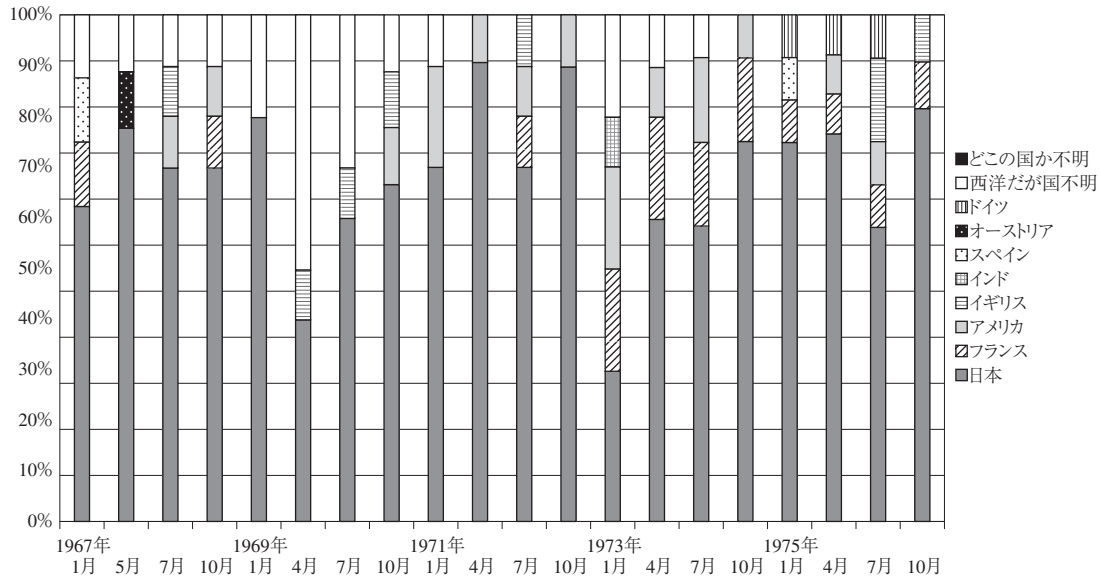


図1 マンガ作品の舞台となった国の割合

#### 4. 「アメリカ」と「フランス」の描かれ方

先に述べたように、この時期の少女マンガの舞台としては、「西洋だが国不明」以外の特定できる国として「アメリカ」と「フランス」が突出して多いことがわかった。この2つの国は作品中で具体的にどのように描かれているのか、引き続き『週刊マーガレット』からみていく。

アメリカが舞台の作品としては、1967年では「ブロードウェイの星」（水野英子）、1969年「おくさまは18歳」（本村三四子）、「挑戦」（丘けい子）、1971年では「美人はいかが?」（忠津陽子）、「リミーにおまかせ!？」（本村三四子）、「こんにちはスザンヌ」（西谷祥子）、1973年では「きよしこの夜…」（須崎まりこ）、「おーい海!」（西谷祥子）、「恋するシャララ」（横川文代）などがあげられる。

フランスが舞台となる作品は、1967年では「サ・セ・パリ」（わたなべまさこ）、「太陽のカトリーヌ」（本村三四子）、1971年では「おしゃれなシャンゼリゼ」、1973年では「ベルサイユのばら」（池田理代子）、1975年では「エミールのたたかい」（鈴木葉子）、「蝶よ美しく舞え!」（原作・原淳一郎、マンガ・菊川近子）などである。

これらの作品をみていくと、「アメリカ」と「フランス」、それぞれにある程度共通したイメージが描かれていることがわかる。以下にアメリカとフランス、それぞれの作品に見られる特徴をまとめた（表2）。

表2 「アメリカ」と「フランス」の特徴

| 舞台となる国 | 主人公の特徴        | 設定の特徴                   |
|--------|---------------|-------------------------|
| アメリカ   | ショートカット、明るく活発 | ブロードウェイ、CIA、貧乏、資本家、人種問題 |
| フランス   | 高貴な血筋、おしゃれ    | 貴族、ファッション               |

まず、アメリカを舞台とする作品では、ブロードウェイやCIAなど実在する有名なエンターテインメントや組織の名称が使用され、主人公の少女が苦労の末サクセス・ストーリーを歩む話が散見された。一方、フランス舞台の作品ではほぼ全作品で「貴族」と「ファッション」のモチーフが使用されており、プリンセスが社交界で華やかなドレスやアクセサリーを身につける場面が描かれ、立派なお屋敷や家具などが頻繁に登場する。それに対し、アメリカを舞台とする作品の場合は裕福な家庭という設定でも一代で財を築いた資本家であるなど家系の歴史や伝統を感じさせない設定となっている場合が多い。フランスを舞台として「ファッション」をモチーフとする作品には主人公がデザイナーという職業設定が複数見られ、パリ・コレクションや有名通りのブティックといった華やかな場面が多用される。また、アメリカ舞台の作品中にフランスやイギリスなどのヨーロッパに関する記述

が登場する場合もあり、アメリカとは異なる文化として洒落者、キザ、貴族、伝統などの要素として使用されている。

登場する数としては「アメリカ」が「フランス」より1作品多く最多となっているが、その背景には、戦後の日本におけるGHQによる占領政策、英語教育の導入といった政治的な強い結びつき、メディアに流れる情報量の多さなどが指摘できる。その点を考慮すると、逆に、そうした政治的な強いつながりを持っていたとは言い難いフランスが、アメリカと並ぶほどに数多くの作品の舞台になっていた点は見逃げせない。『70年代マンガ大百科』によると、「70年代の少女マンガの舞台となる外国は恐ろしいほど偏っていた。(中略)少女マンガの世界の中心はフランスだ。そしてヨーロッパとアメリカでほぼ世界は構築されている」とし、「70年代少女マンガの歪んだ世界観、少女マンガにアジアはいらない!」というキャッチコピーがつけられている<sup>11)</sup>。

前述の竹宮恵子は、少女マンガにおいてアメリカではなく欧州舞台の作品が数多く描かれた背景について、1970年代の少女マンガには「芸術性への指向」が存在したと述べている。「その後の少女マンガを牽引した少女マンガ作品には必ずと言っていいほど現れている欧州指向も、その芸術性指向のうちに入るといい」、欧州を描くことは、即ち芸術性を醸し出すことに繋がる。当時の欧州は生活の中に芸術がそのまま存在する場所(建物、自然、生活具、美術館が渾然一体)であり、それこそが欧州の無形文化財であると私たちは感じていた」としている。少女マンガ作品に多く現れたフランス舞台の作品、読者が求めた「フランス」については、今後も調査を続けていく予定である。

## 5. 減少する「外国」舞台作品と変化する少女マンガ雑誌の役割

1960年～1970年代に少女マンガ雑誌において人気を集めた「外国」を舞台とした作品であるが、1980年代以降減少していくこととなる。『週刊マーガレット』1983年1月、9月、10月<sup>12)</sup>には総作品数34のうちすべてが日本を舞台にした作品となる。その後、月2回刊に変わった『マーガレット』1991年1月、4月、7月、10月でも総作品数63のうち、59作品が日本舞台(アラブ、欧米、ケニア、その他がそれぞれ各1作品)、2013年1月、4月、9月、10月では84作品のうち、83作品が日本(不明が1)であり<sup>13)</sup>、現在ではほぼすべてが日本を舞台とした作品となっている。

なぜ『週刊マーガレット』のなかから外国を舞台とする作品が減り、日本を舞台に展開する物語がほとんどを占めるようになったのか。それには少女マンガ雑誌が果たしてきた役割を考える必要がある。米沢は1960～1970年代の少女雑誌における西洋描写は、かつて銀幕に日本人が抱いたあこがれがそのまま少女たちにも適用されたものであるとし<sup>14)</sup>、映画が与えていた外国へのあこがれを、少女雑誌が少女たちへのあこがれとして与えるようになったことを指摘している。また、少女雑誌は抒情画からの流れをくみ、少女のファッションのお手本としての役割も果たしていた。ストーリーの流れに関係なく挟まれる「スタイル画」や、主人公の少女が着ているドレスをプレゼントするといった企画も、そうした流れから生まれたものだろう。

竹宮恵子は、1970年の『an・an』、1971年の『non-no』の創刊に触れ、それには当時の女性たちの大多数が「わが意を得たり」と感じたはずであり、「女性誌では、毎号のように欧州特集が生まれ」、「そこで育まれる夢は、右肩上がりの好景気であった」と振り返る<sup>15)</sup>。このことから1980年代以降に『週刊マーガレット』のなかで外国を舞台とする作品が減少したのは、1970年代以降ファッション雑誌が創刊され、少女たちのあこがれる「外国」の情報が別のメディアでより具体的に得られるようになったことと関連があるのではないだろうか。

ファッション雑誌においては、外国人のモデルが最新のファッションを着こなし、ロケによってフランスの街並みなども美しいカラーのグラビア印刷で見ることができる。ファッションの「新しさ」や「華やかさ」、外国に関する情報などを求めるならファッション誌を読むほうがよく、それを少女マンガで描く必要はなくなったとも

11) 『70年代マンガ大百科』、宝島社、1996年、p.165。

12) 1月1日号、9月30日号、10月21日号

13) 2015年度茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科専門科目I「基礎演習」(村上・猪俣担当)での集計結果を参考とした。

14) 米沢1980=2007、p.147。

15) 竹宮2011、p.111。

いえるのである。

## 6. 他のメディア文化との関係

このように考えるとき、少女マンガ雑誌について考える際に、他のメディア文化との影響関係に注目することの重要性がみえてくる。

そもそも米沢が指摘しているように、水野英子などはハリウッド映画を翻案した「ロマコメ」作品を多く描いており、映画が与えてきた外国へのあこがれを少女マンガの中に取り込んだ作家である。アメリカを舞台にした作品としてあげた、1969年の「おくさまは18歳」(本村三四子)、その続編となる1971年の「リミーにおまかせ!？」(本村三四子)は、後にテレビドラマ化されて話題となった作品だが、そこにはアメリカのテレビドラマ「おくさまは魔女」の影響がみられる。また「おくさまは魔女」が日本で初めての「少女」向けテレビアニメ「魔法使いサリー」の着想に関わっていることも見逃せない。原作となった横山光輝による「魔法使いサリー」(当初のタイトルは「魔法使いサニー」)は、1966年から1967年にかけて『りぼん』で連載されており、西洋文化へのあこがれが端々にみられる作品となっている。ハリウッド映画やテレビドラマなど、アメリカの大衆文化が日本の「少女」向けメディアにどのような影響を与えたのかという点については、さらに考えていく必要があるだろう。

フランスに関しては、日本に対する文化的な影響力が戦前から確認できる。19世紀末頃から日本人芸術家が渡仏するなど、日仏関係は「政治、産業ではなく、文化の領域で深まって」いったとされる<sup>16)</sup>。「少女」向けメディアに影響を与えた大衆文化として、戦前にフランスから輸入され日本で独自の発展を遂げたレビューやシャンソンがあげられる。宝塚少女歌劇団にて1927年に発表された「日本初のレビュー」とされる「モン・パリ(我が巴里よ)」は、外遊帰りの岸田辰弥による演出が話題になり、主題歌も大ヒットした。その後、岸田の弟子となる白井鉄造がそれらのレビューをさらに進化させ、「パリ=宝塚=ユートピア」という図式を推し進める。宝塚少女歌劇において、パリはパステルカラーに彩られたロマンチックなユートピアとして描かれるようになった<sup>17)</sup>。戦後には大々的なシャンソンブームが起こるなど、「フランス=パリ=ユートピア」といったイメージは女性にも広く共有されたと考えられる。

美術の世界でも、戦後は若い女性たちのあいだでフランス美術の人気が高まり、海外の美術を受容する環境を大きく変えていった。たとえば、1950年代半ばころには、ゴッホの展覧会に20代から30代の女性たちが列を作る「ゴッホ・ブーム」があったが、戦前からフランス美術を愛好していた美術評論家や男子学生たちとのあいだのジェネレーション・ギャップが指摘されている<sup>18)</sup>。「美術の低俗化」への嫌悪を示す男性たちと、シャンソンブームの波に乗って、ゴッホの複製画展やダミア<sup>19)</sup>のコンサート会場に集まる女性たちとの対比は興味深い。

また、フランス人形を作ることからその経歴をスタートさせた中原淳一は、宝塚のトップスターを妻としている。ちょうどシャンソン喫茶「銀巴里」が開店し、日本においてシャンソンブームが高まっていく時期でもあった1951年に渡仏し、自身の雑誌「それいゆ」や「ひまわり」に「パリ便り」を掲載するなど、フランス文化を日本の少女たちに紹介した重要な人物である。

少女雑誌は、戦前から宝塚歌劇の情報を数多く掲載したほか、中原をはじめ人気を誇った挿絵画家たちがフランスへのあこがれを媒介してきたといえる。中原の影響を受けて少女雑誌にイラストを描き始めた高橋真琴は、1950年代に貸本マンガでパリへの憧れを描いている。「パリ～東京」には、セリフにフランス語が差し挟まれたり、コマ枠の外にカタカナのフランス語とその意味がメモのように書かれている。それらは、パリが「憧れの都」であったことをわかりやすく示しており、さらにそれを読んだ少女たちのなかに「パリ」の華やかなイメージを強く印象付けた。

16) 今橋 1993=2001, p.27。

17) 「近代日本とフランス——憧れ、出会い、交流」国立国会図書館電子展示会、2014年12月公開 ([http://www.ndl.go.jp/france/jp/column/s2\\_4.html](http://www.ndl.go.jp/france/jp/column/s2_4.html))

18) 服部・藤原 2014, pp.197-198。

19) フランスのシャンソン歌手として人気だったマリー＝ルイーゼ・ダミアン。

戦後の日本にとって、アメリカほど強い政治的な結びつきをもたなかったフランスが、1960年代から1970年代にかけて少女マンガの舞台として数多く描かれた背景には、こうした戦前から続く少女文化の素地があった。それらは竹宮たちの世代の「芸術性志向」にも影響を与えていると考えられる。

## おわりに

今回の調査はごく限られた範囲のものであったが、少女マンガが「外国」をどのように描いてきたのか、その一端を知ることができた。ただ一方で、いくつかの課題もみえてきている。そのひとつは、雑誌を調査する方法論に関するもので、数量的な調査は対象をフラットにみるうえで利点も多いが、当然ながら限界もあるという点だ。

今回の調査では、連載されるすべての作品を等しく「1作品」と数えているが、マンガ雑誌は、その掲載順やカラーのページ数などで、明らかに雑誌の「顔」となる作品とそうでない作品とが分けられるという特徴を持つ。今回の場合、たとえば、フランスを舞台とする作品としては、1972年から1973年にかけて「ベルサイユのばら」が連載されているが、後半のストーリーが盛り上がった時期には表紙を飾ることも多く、熱い煽り文句とともにまさに雑誌の看板連載となっていた。そうした作品は、読者に強い印象を与え、長く記憶に残るだろう。そのような作品と新人作家の読み切り作品などが同じ重みづけで、どちらも「1」としか数えられないため、そこで得られたデータは読者の印象とは異なるものとなる可能性がある。

今回は調査期間を通して、平均すると「外国」を舞台とした作品はおよそ3割、残る7割が「日本」を舞台とした作品であるという結果が得られた。しかし、「外国」を舞台にした作品には各号の巻頭や前半部分に掲載される看板作品が多く含まれており、当時の読者の印象としては「外国」舞台の作品がもっと多かったという印象があるだろう。表紙への登場回数やカラーページ数なども含めた考察も求められる。今後は雑誌メディア、とくにマンガ雑誌の特徴を考慮した調査の方法について、さらに模索する必要があると考えている。

また、今回対象としたのは『週刊マーガレット』のみである。『週刊マーガレット』は発行部数が多く、「少女マンガ雑誌の女王様」というキャッチコピーも頷ける雑誌だが、とくに1970年代以降は競合するマンガ雑誌も増え、各雑誌が各々の特徴を出すために差異化に励む面がみられる。今後はほかの少女マンガ雑誌をはじめ、本稿で指摘したように他のメディア文化との影響関係も幅広く視野に入れながら、引き続き調査を進めたい。

## 引用・参考文献

- 猪俣紀子、「フランスの少女向け媒体におけるBD」、『世界のコミックスとコミックスの世界／Comics Worlds and the World of Comics』（ジャクリース・ベルント編）、京都精華大学国際マンガ研究センター、pp.173-184, 2011年。
- 、「フランスにおけるマンガ研究」、『日本マンガと「日本」——海外の諸コミックス文化を下敷きに』（ジャクリース・ベルント編）、京都精華大学国際マンガ研究センター、pp.235-248, 2014年。
- 、「フランスにおける日本マンガと日本におけるバンド・デシネ——ポピュラーカルチャーの日仏交流」『フランスと日本——遠くて近い二つの国』（長谷川富子、伊川徹、饗庭千代子編著）、早美出版社、pp.267-282, 2015年。
- 今橋映子、『異都憧憬——日本人のバリ』、平凡社、1993=2001年。
- 大城房美、「少女まんがと「西洋」——少女まんがにおける「日本」の不在と西洋的イメージの氾濫について」、筑波大学文化批評研究会編『〈翻訳〉の圏域 文化・植民地・アインデンティティ』、pp.525-544, 2004年。
- 、「〈越境する〉少女マンガとジェンダー」『マンガは越境する!』、世界思想社、2010年。
- 、「日本式少女マンガから女性マンガへ——「周縁化」から始まる主体性表現」『女性マンガ研究——欧米・日本・アジアをつなぐ MANGA』、pp.20-47, 青弓社、2015年。
- ジャクリース・ベルント、「少女マンガから見た『GIRL』——その日本での受容を左右するメディアスケープと民族性表現」『女性マンガ研究——欧米・日本・アジアをつなぐ MANGA』、pp.84-105, 青弓社、2015年。
- 竹宮恵子、「1970年代の少女マンガにおける芸術性への指向とその目的」、『美術フォーラム21』、第24号、醍醐書房、pp.110-113, 2011年。
- 藤本由香里「少女たちの王国——「マーガレット」「別冊マーガレット」リアル読者の半世紀」『わたしのマーガレット展 公式図録』、pp.242-247, 集英社、2014年。
- 増田のぞみ、「少女マンガ」と「女子マンガ」——女性向けマンガに描かれる「働く女性」のイメージ」『女子の時代!』（馬場伸彦・池田大臣編著）、青弓社、2012年。



———, 「少女雑誌における「漫画」的表現を辿る——明治末期から大正期における『少女の友』と『新少女』分析より」『マンガジャンル・スタディーズ』, 臨川書店, 2013年。

———, *Shojo Manga and Its Acceptance: What Is the Power of Shojo Manga?*, in Toku, Masami (ed.), *International Perspective on Shojo and Shojo Manga: The Influence of Girl Culture*, Routledge. 2015.

服部正・藤原貞朗『山下清と昭和の美術——「裸の大将」の神話を超えて』, 名古屋大学出版会, 2014年。

米沢嘉博, 『戦後少女マンガ史』, 筑摩書房, 1980=2007年。